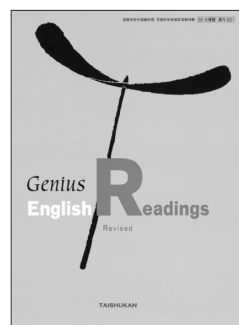


Genius English Readings Revised

■Lesson 3 Let's Be Proud!

ICTが拓げる可能性——ユニバーサル社会のために



Genius English Readings Revised では、Lesson 3 Let's Be Proud! で、神戸のNPOプロップ・ステーションと竹中ナミさんの活動を紹介している。竹中さんは1991年の設立以来、コンピュータ・セミナーなどを通して、チャレンジド（障がいのある人について、この呼び方を提唱している）の人たちのスキルアップや就労に尽力してきた。最近の活動と竹中さんの現在の思いをうかがった。（構成・編集部）

プロップ・ステーションの最近の活動

設立以来のICT関連セミナーは2008年から神戸だけでなく東京でも開催しています。一般向けのワードやエクセルの講習に留まらず、グラフィックやホームページ作成などを、プロの講師に直接習えるのがプロップのセミナーの特徴です。設立から20年近く経ち、最近はこのセミナーの卒業生で現在プロとして仕事をしているチャレンジドの人が、講師も務めるようになってきました。

私たちプロップ・ステーションのサイト(<http://www.prop.or.jp>)も彼らの作品です。このサイトは、デザイン性にも優れ、動画も含めて非常に情報量が多く、更新も頻繁に行っていますが、ほとんどすべてチャレンジドのスタッフの手で作成されています。重要な記事は英文でも提供していますが、この英訳もネイティブを含めたチャレンジドの人たちによるものです。

さらに製菓部門での試みも始めました。プロップの本拠地、神戸は日本の洋菓子発祥の地。チャレンジドの人たちは作業所などで製菓作りに携わることもあります。ただし、これまではあくまで

チャリティ販売という扱いで、技術的にも品質的にも、一般の商品とは開きがありました。それを続けていてもビジネスとしてはなりたない。おいしいからといって買ってもらえるようにするためには、プロの職人に学んで、品質を上げなくてはならないと考えたのです。

2008年に神戸で始まった「神戸スイーツ・コンソーシアム」は、全国から選ばれた受講生がモロゾフなど有名メーカーのパティシエに半年間、さまざまな製菓技術を教わるというものです。パティシエの方にはボランティアに協力いただけたほか、日清製粉の協力で高品質な材料を提供いただくことができました。昨年は第2回を東京で行い、今年度も引き続き開催していく予定です。

高等学校との連携

進路選択の段階で有効なスキルを身につけるには、学齢期からのスキルアップが必要です。そのため、最近では高校生を対象にしたセミナーも行っています。昨年は東京都の石神井特別支援学級の生徒を対象に、コンピュータでの描画や簡単アニメーション作成の集中講座を行いました。ワードやエクセルに日頃慣れていても、初めてふれたグラフィック分野の作業に、生徒たちはそれぞれの個性を発揮し、高校生ならではのセンスで講師を驚かせるほどでした。また、目標に向かって集中して取り組んだ経験は生徒同士の仲間作りにもつながりました。この成功を糧に、今後、東京都と特別支援学級、プロップの3者が共同して、講習を行うことを予定しています。

チャレンジドの人にとってのコンピュータ

従来おもに肢体や聴覚など身体に障がいのある人の補助となってきたコンピュータですが、現在は発達障がいや知的障がいのある人にも欠かせないツールとなってきました。たとえば、ある受講者は本の形態ではひらがなを拾い読みするにとどまるのですが、コンピュータ上では描画ソフトや表計算ソフトを使いこなし、さまざまな作業が可能です。このようにメディアの幅が広がることでその人の能力が表れてくることがあります。

特にセンスそのものが伝わるグラフィック作品からは、その人の深い心のひだがかえることがあり、言葉では伝えることができない場合など、一種のすごみを備えていることがあります。

また、国土交通省で推進されている「自律移動支援プロジェクト」というものがあります。これは観光地を車いすなどで移動する際に、チャレンジドの人たちが知っておきたい情報などを携帯を通じて得られるという情報サービスで、プロップ・ステーションも参加しています。こうしたサービスがあれば、観光業界でもチャレンジドや高齢者の方などを通常のお客さん、ユーザーとして見込むことができるんです。これも私たちの目指すユニバーサル社会のありようのひとつです。

高校生にこそ変えてほしい意識

私たち日本人は情が深いという美点を持っています。たとえば、障がいのある人がいたら、気の毒、かわいそう、とまず思う。でもそこで留まってしまうと上からの目線になってしまいます。そこを一步進めて、ではこの人たちが自分と同じように生活するには、何が必要かを考えてみる。そんなふうに見方を変えることを習慣づけていくことが必要で、考え方の柔軟な若い人たちにこそできることだと思います。

仕事は創るもの

チャレンジドの人たちの就労をめぐる状況は、



竹中ナミさん

かつての女性の就労をめぐる状況と似ています。以前は女性は労働力としてとらえられていませんでしたが、今は働くのが当たり前。位置づけはズいぶん変わってきました。

私自身、重度の障がいがある娘を24時間介護していた時は、社会に出て働くことができない悔しさを痛感しました。でも、企業でフルタイムで、といった働き方の前提を変えてみたら、今の仕事が見えてきたんです。不況下で育ち、進路に迷う生徒さんたちにも、働きたい気持ちがあって、スキルを磨く努力をすれば、道は開ける。仕事は創るものだよと伝えたいですね。

支え合う＝プロップの精神

スキルを磨くことは必要ですが、すべて自分一人ですることができることだけを目指しているのではありません。私自身、プロップ・ステーションのスタッフたち、チャレンジドの人たちに100%支えられているとっていいくらいです。たとえば、私の場合、「口と心臓」には自信がありましたが、コンピュータや英語、経理など、自分にはできないことがあっても、他のできる人が支えてくれたからこそ活動を続けてこられたのです。お互いのできることに着目して、支え合うことがなにより大切だと思っています。

たけな
(竹中ナミ・プロップ・ステーション理事)